

W E P

VOL.
ウエップ
俳句通信

136

俳句通信

特別作品20句 下鉢清子「三伏」

特集 〈“散文的”といわれる句の面白さ〉

「散文のふりをした韻文」 神野紗希

「批判的に使われる“散文的”という言葉」 栗林 浩

「『散文的』であること」 岩田由美

「『散文的』か『平句的』か」 堀田季何

「散文的といわれる句の面白さについて散文的に

書いてみた、しかし本当に？」 高山れおな

「散文的俳句って何？」 西池冬扇

【競詠16句】

田島健一「掌の作法」

堀本裕樹「猿のかほ」

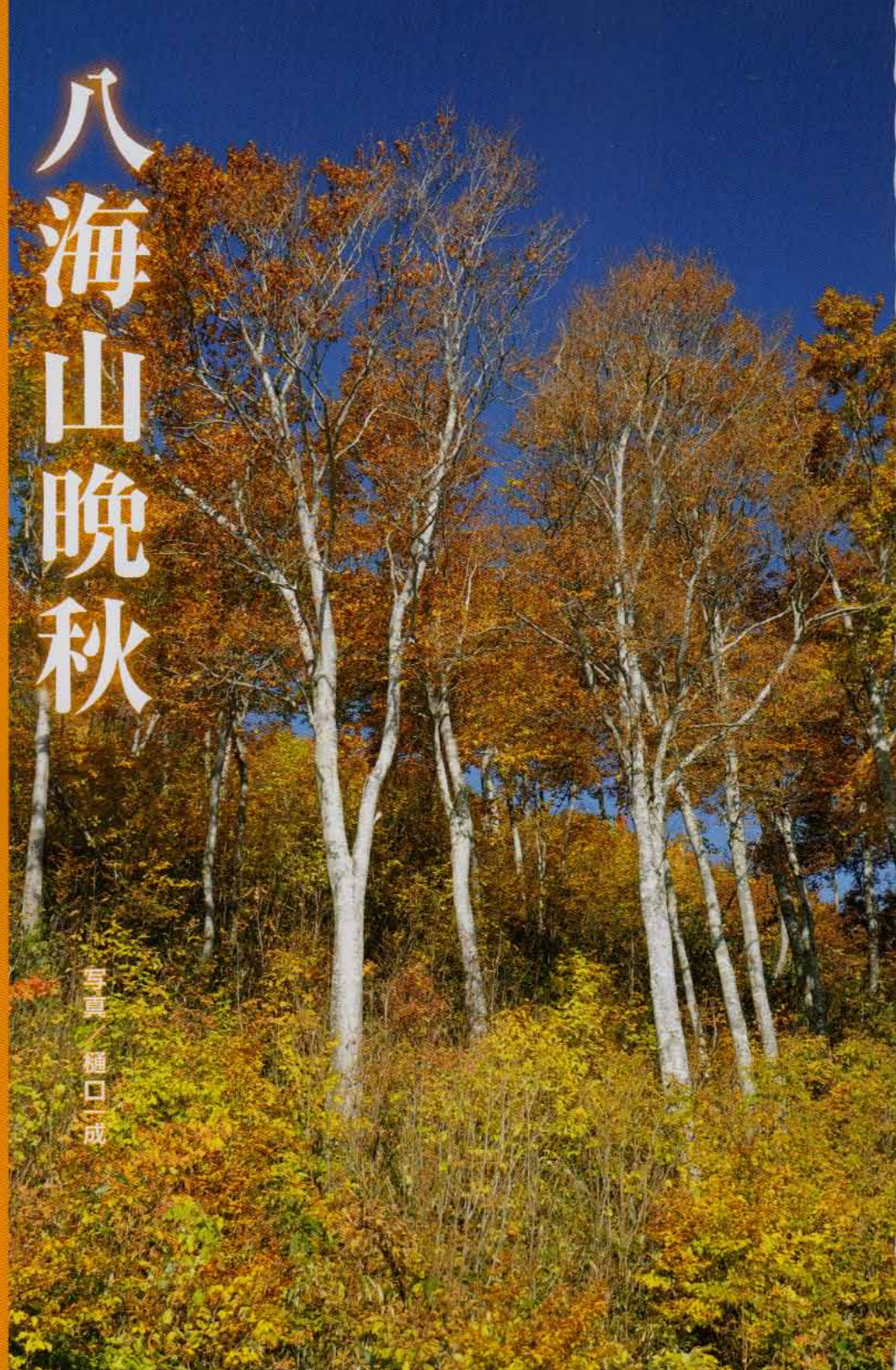
篠崎央子「添ひ寝」



作品／加藤耕子・大高霧海・柴田鏡子・高崎公久・渡辺純枝・南うみを・八田夕刈・
山口昭男・稲畑廣太郎・石田郷子・小林貴子・矢野景一・倉林はるこ・野口 清・
高松守信・矢須恵由 はか

八海山晩秋

写真／樋口一成



露けしや誰彼想ふ歩をすすむ



林 いづみ

家の近くには善福寺池、石神井公園、井の頭公園に三宝寺池があり散歩には事欠かない。三宝寺は母方の菩提寺であり、墓参の後必ず裏道を抜け池へと回る。池はさほど大きくはないが野鳥保護林と隣り合い、かつての豊島城の土塁も残り、道路を挟んで石神井公園にも繋がっている。

折々コースを変えて自然に親しみつつ巡るが、余り手を加えていないのが好ましく、池からは高層の建築物が目に入る事がない窪地の様子を呈している。

本道をたどりメタセコイアの立ち並ぶ池の辺には長居をしよう。これからは水鳥も渡ってくる。

ある時書物から、生前の波郷がわざわざ車を廻してあき子夫人を呼び、二人で最後に歩いたのが三宝寺池との記載を見つけた。こんな偶然もこの池に惹かれる大きな一因で足を運ぶ機会が増えている。

遠き日のくすぐったくて猫じやらし

安田 青葉

二〇一一年一月十日、我が家は新しく家族となる犬を迎えた。その三月十一日、東日本大震災が起きた。その時、近所で買い物をしていた私は、揺れの収まるのを待って必死で家に駆け帰った。するとケージの中の彼は、何事もなかったかのようにびよんびよん跳ねてお帰りをしてくれた。あれから十二年、彼との朝夕の散歩が、この妙正寺川沿いの遊歩道である。お決まりのベンチに彼と腰掛け、朝日や夕日、雪や草木を見て風を感じるのが好きだ。

川上と川下には所縁のお寺があり、彼が着い頃にはよく走って往復したものだ。



特別作品
20句

三伏

下鉢清子

園丁来る夏至の椿に脚立立て

ラジオ体操出まかせ体操花ダチュラ

邦憲のジャグル涉り梅雨に入る

荒壁を楯の守宮と籠りゐる

高浪に送り出さるるサーフィン

押し蓋の手応えたしか梅漬ける

あるときは夜振りの人を呼ぶランタン

草笛を吹いてかすんでしまふ人

ビール手に木洩れ陽踏んでくる漢

烏兎勿勿仕掛け花火の横走り

栗南瓜正直値段と言ふ店主

特集

「散文的」といわれる句の面白さ

「この句は散文的」といわれるとき、
「散文的」という言葉はほとんど否定的に使われています。
しかし、「散文的」といわれる句にいいものがあるのは確かなようで、
また近ごろでは「散文的」な句が増えてきているようにも思われます。
その辺のところをどう考えているか、6人の俳人にお書きいただきました。

神野紗希 栗林 浩 岩田由美
堀田季何 高山れおな 西池冬扇



前列右から横井氏、西生氏、中田氏
後列右から星野氏、田中氏、藤本氏

ゲスト 西生ゆかり・田中亜美
中田尚子・横井理恵
ホスト 星野高士・藤本美和子

編集部 本日の参加者は「街」同人の西生ゆかりさん、「海原」同人の田中亜美さん、「絵空」同人の中田尚子さん、「天為」同人の横井理恵さん。5句投句、7句選です。忌憚のない意見交換をお願いします。
高士 割れましたね。圧倒的に2点句が多いね。4点は1つ。では4点句から行きます。

雲梯の足秋草を掠めけり

◎◎◎◎

理恵 情景がよく浮かぶ句だと思いました。「秋草を掠めけり」で「秋草」が伸びていくいまの季節がよく出ていると思いました。

亜美 同じです。情景がよく見える句だと思います。その意味では、あるかなとは思いました。でも「……足秋草を……」の韻律がすごくよくて、「秋草」の揺れが見えてきていい句だなと思いました。

ゆかり これは「雲梯」を使っている本人ではなくて、それを横から見ている人の目線だと解釈しました。「雲梯」をやっていたら、必死にやっているの、自分の足には意